新潮文庫

木枯しの庭

曽野綾子著

新潮社

木枯しの庭

新潮文庫　　そ-1-12

昭和五十六年三月二十五日　発行
平成七年四月二十五日　三十六刷

著者　曽野綾子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六—五四四〇
読者係(〇三)三二六六—五一一一
振替　〇〇一四〇—五—八〇八
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社
© Ayako Sono 1976　Printed in Japan

ISBN4-10-114612-8 C0193

新潮文庫

木枯しの庭

曽野綾子著

新潮社版

木枯しの庭

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　拒絶する家

1

公文剣一郎は、四時少し過ぎると、研究室の自分の机のあたりをきちんと片づけた。公文は何か書く場合、下書きを鉛筆でする癖があった。書かれた字面を見ながら、それを消しゴムで消し、消しては書き、そのような操作の間に、少しずつ、考えや論理の中から夾雑物をつまみ出し、端正な文章にして行く。いきおい、彼の机の上には、消しゴムのかすが散らばった。彼はそれを、時々、小さなチリトリで始末した。チリトリと言っても、只のチリトリではない。テーブル・クロースのかかった食卓で食事をする人々がパン屑を集めるのに使う、銀製の彫刻入りの小さなブラシとチリトリである。

本は、明日また使う場合が多いのであまり神経質に片づけはしなかった。片づけないが、テーブルの上にきちっと重ねて置く。公文は平行、或いは水平垂直ということが、かなり気になる男であった。本が机の二辺のどの線から見ても、平行になるように置きたかった。これは公文にとってみれば、実に簡単な作業であった。一文も金がいることではないし、そのためにとくに、長い時間がかかる、ということでもなかった。ちょっとしたことで、折目正しい秩序が作れる。そ

れなのに、こんな単純なことさえ、やれる人間が極めて少ないというのは、どういうことだろう。少なくとも助手室にいる五、六人、英文学科事務室にいる二人の若い男・女共のうち、武井という男の助手を除いては、一人だって、こういう公文の美学に関心を持つ者はいない。武井は眼鏡をかけた癲癇性気質の男で、この世で秩序だけしか愛していないように見える。

公文は、軽い合オーバーを着、テーブルの上の、チェコのカット・グラスの灰皿に、客がのんで行った二本の煙草の吸い殻が入っているのを見ると、それを学科事務室のギャベージ罐まで捨てに行った。事務室には、山田という若い娘がいたが、何か読んでいるふりをして、公文の入って来たことに、気づいてもいないように見せていた。何十畳の大きな部屋ではあるまいし、誰かが入って来た気配さえわからぬということは考えられないのである。又、山田という娘が我を忘れて本の世界に没入するほどの読書家だという風評も聞いたことがない。公文はこういう人間共に、とっくの昔に愛想をつかしている。愛想をつかしているから期待も頼みもしない。総て、自分でやるのである。第一、連中に扱わせたら、この繊細なカット・グラスは、一週間と無傷ではいまい。

学部の建物の外へ出ると、正門迄の道は銀杏並木であった。この聖約翰大学は昭和二十八年の創立で、れっきとした戦後派大学だから、年輪の古さなど、あろう訳はないのだが、それでも、当時若木だったと思われる銀杏並木も、二十余年の歳月が経つと、幹もかなり太くなり、秋になるとその葉の黄金色は、息をのむばかりの濃さになる。

正門までは、約百米ばかりなのだが、そこを歩く時、公文は時々、この大学を建てた人々の執念を思うのであった。聖約翰というと、知らない人々は、新約聖書のことですか、などという。

しかしこれは聖ヨハネのことであり、上海（シャンハイ）には聖約翰という同名の大学があったのである。中国に北京（ペキン）政府ができたのは、昭和二十四年だから、聖約翰にいたアメリカ人宣教師たちが上海を逃れて、この川崎市のはずれの丘陵地帯にアメリカから設立資金を得て同名の大学を作り、ここをカナンの地と思ったという気分もわかるような気がするのであった。もっとも、公文がアメリカのオマハ郊外にある聖（セント）ジョン大学で修士課程を終えて帰国し、創立されてまだ五年目の、姉妹校である聖約翰大学に奉職した昭和三十三年頃には、上海から来た開祖グループの中ではアルバートという牧師が一人いただけであった。

今、銀杏はもう終りかけであった。毎日毎日際限もなく散る銀杏の枯葉を掃いているのは、片脚が義足の工藤という男である。それはアルバート牧師が、日本で拾った男の一人であった。工藤は白衣を着て傷病兵の恰好をして、駅で人々から空罐に金を貰っていたのである。その彼を自棄的な気分から脱出させ、働く誇りを持たせたのはアルバートであった。以来、二十年間、工藤は、毎日、学内の整備をしている。

銀杏の色は褪（あ）せかけていたが、今日、夕映えはすばらしく鮮やかであった。西の空は茜色（あかねいろ）に染まって、その中に銅板を切ったように見える裏富士がくっきりと見えていた。

公文は小田急線に乗ったが、いつものように、自宅のある成城学園前では下りなかった。彼はそのまま新宿へ出て、それから丸ノ内線で、大手町へ出た。

お濠端（ほりばた）の地上に出た時は、すでに、あたりはとっぷりと暮れていた。都会の灯は心をそそるようであった。公文は風にさからうように五分ばかり歩いてGというホテルに入った。ロビーの椅子に腰を下ろす前に、彼は腕時計を見た。それは水晶時計と言われるもので、精度はかなりいい

筈だが、それでも一カ月間に一秒くらいは狂う。今は半秒くらいずれていると思わねばならない。その時計が、五時二十八分をさしていた。

公文は、あたりを見廻して、公衆電話のありかを見つけると、ポケットの中の小銭入れを探りながら、そちらの方へ歩いて行った。公文はダイヤルを廻しながらもロビーに出入りする人の顔に注目していた。長い間待って、やっと電話のつながる音がした。

「もしもし、お母さんですか。剣一郎です。今、どこにいたんです？」

「上田の佐藤さんが、林檎（りんご）を送ってくれてね。それが玄関に届いて来たの。私ひとりじゃ、台所まで運べないし、玄関に置いておくと汚ならしいから、運送会社の人にちょっと心づけをあげて、内玄関へ運び入れてもらったのよ」

「それは大変でしたね。置いておいてくれれば、僕が帰ってから動かしたのに」

「いいのよ。あなたは疲れて帰るんだから、ちょっとしたお金でカタがつくことならつけたらいいのよ」

母の絹子は、今年六十五歳であった。心もちかすれたような独特の物の言い方をする。

「僕、今、銀座に来てるんです」

公文は言った。厳密に言えば、大手町は銀座ではないが、そう言った方がわかりやすいので、嘘をついているつもりはなかった。

「実は大学の連中と来てましてね。ちょっと飲んで帰ろう、ということになったんです。そんなには遅くならないと思います。九時か、九時ちょっと過ぎには帰れます」

「ああ、わかりましたよ」

「その前にも、脱け出せたら帰ります。何か夕食のもの、ありますか？」
「ええ、何か昨日の残りものがあると思うから、それで済ませておきますよ」
「どうもすみません。じゃあ」
公文が電話を切った時、ロビーの出入口の方から、黒いアストラカンのコートを着た女が入って来るのが見えた。公文は一瞬、受話器を置いたままの姿勢で、その女を見つめていた。彼女はきょろきょろあたりを眺めたりもしなかった。真直ぐ、ロビーの空間を横切ってソファの所まで行くと、ゆっくりと腰を下ろし、それから初めて、あたりを柔らかく見廻した。誰かと待ち合せる約束があればこそ、この女はここに来たに違いない。しかし、彼女には、自分の方から、相手を見つけ出さねばならない、という感じは少しも見えなかった。彼女は、自分がどこにいようと、目ざす相手が、自分を見つけてくれるに違いないことを信じているようだった。
公文はやっと身を起して、女の方に近づいて行った。
「いやあ、遅れてすみませんでした」
公文は言った。
「いいえ、私もたった今、来たんです」
女は化粧っけもないような顔をしていた。しかしもともと色が白いたちなので、その顔はアストラカンのコートにきちんと収まっていたし、たとえ彼女が、さんざん塗りたくったとしても、持って生れた、静かなやや淋しげな表情が消えるとも思われなかった。
「今日は、これから後、何か約束があるの？」
公文は尋ねた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「いいえ、そういう訳でもないですけど、あなたと、そう長くお喋りをする理由もないから、どこかで、用事だけ伺うわ」
「じゃあ、下のバーへ行こうか。コーヒーを飲みながらより、喋りいいから」
女は何も言わなかった。微笑の影に似た表情が水のようにその口端に泛んだが、公文でさえ、それに気づかないくらいだった。
「突然、呼び出して済まなかった」
地下のバーのテーブルに就くと、公文は謝った。
「いいえ」
「急ぎ、という訳でもないんだけど、今日はちょっと時間ができたもんだから、僕の方の一方的な都合で、今日中に会えたら、と思ったんだ。あ、昔の通りで、カンパリでいいのかな」
公文は、傍らにボーイが注文を聞くために立っているのに気がつくと、女に尋ねた。
「いいえ、私は、ドライ・シェリーを頂くの」
「僕はじゃあ、カンパリ・ソーダにしてくれ給え」
公文はそう言ってボーイを遠ざけた。
「お元気そうね」
女は公文に言った。
「少しお太りになったみたいだけど」
「中年太りだよ。君は少しも変らない」
「いいえ、私は年とってしぼんで来たの」

女はやっと笑った。
「久しぶりに、会社に電話したもんで、君の動静がわからないもんだから、《ずっと昔に、そちらにいられた星野東籬子さんいられますか》って言ったら、《星野なら、ずっとおりますが》って言われてしまった」
「ええ、行き場がないもんですから」
「もう一度、結婚する気はないの？」
東籬子は、夜明けの気配に似た微かなほほえみの色を消さずに言い返した。
「法的には、私、初婚なのよ、これでも」
「こないだ、乱雑になってた戸棚の古い写真を整理してたら、我々の結婚式の写真のスナップで、僕の全然、知らないのが出て来たんだ」
「嘘ばっかり」
「何が嘘なんだ。僕は本当のことしか言わないよ」
「あなたが、乱雑にしたままの古い写真なんて持っている訳がないわ。どれもきちんと分類してある癖に」
「違うね。その写真はおふくろの戸棚の中の写真なんだ。彼女は誰かが整理をしてくれるまで、決して何も手をつけないたちだから」
ボーイが二人の前に、酒を置いて行った。赤い、ヘヤートニックみたいな色をした液体の入った細長いガラスのコップを公文は見つめながら続けた。
「我々が式を終えてオマハのあの教会を出て来たところを撮ったものでね。君がぺろりと舌を出

して見せてるところなんだ。あれは誰が写してくれたのかな。東君か、西田夫人が、母に送ってくれたのかも知れない」

ちょっと首をかしげただけで、東籬子は何も言わなかった。

「まあ、君の健康のために飲もう」

公文は酒のグラスを形ばかりあげて見せた。

「これは、決して口先だけじゃない。君が、いい人と結婚したらしい、という噂を聞いたら、僕は心からほっと重荷を下ろしたような気がすると思う」

「あんまりご期待下さるとむずかしいかも知れないわ。あなたと暮した百日くらいの間に、私、うんと人生について勉強したの。おかげで、もうなまなかなことに騙されなくなったの。その意味では、感謝もしてるのよ」

「皮肉かも知れないけど、僕はそのまま受けとっておこう」

「今日は何のご用事なの？　別に、昔の古い写真が出て来た、ってことを報告なさるのが目的でわざわざいらした訳じゃないんでしょう」

「いや、実はね、君にちょっと頼みがあって来たんだ」

公文剣一郎は、その時、一瞬苦しげな表情を見せた。

「本当なら、君のような人に、こんな頼みをできることじゃない、っていうことは、よくわかってるんだ。しかし、君はいい人だし、僕は今でも信頼してる。僕たちがうまく行かなかったのも、本当は二人の責任じゃないと思ってる」

東籬子は、ゆっくりと、一呼吸いれてから言った。

「それはね、あなたが甘いと、私は思うわ。たとえ、外的にどんな状況があったとしても、それが離婚の原因になるということは、夫婦に責任があるのよ」
「それは、そうかも知れない。しかし僕は、今、君が言ったように甘いのかも知れないけど、君に対しては、今でも、尊敬も信頼も感じているし、君も僕のことを、それほど怨んではいないような気がしてならないんだ」
「それは、あなたの一方的な印象だということで話を伺っておくわ。遠い遠い昔のことになりましたからね。私も、あの当時は、こんな気持でした、って、確信を持って言い切れなくなってるの」
「実は、僕に、今、縁談があってね」
公文が言うのを、東籬子は無表情に聞いていた。
「遂に僕も、この年まで独身で来てしまったけど、結婚するとすれば、四十五までが、最後のチャンスだと思うんだ。三十代のうちに何とかしたいと思ったんだけどね。妥協するのはいやだったし……」
「それで？」
「実は、まだ決るかどうかわからない話なんだけど、その縁談の相手というのが、君の会社で働いている女性なんだ」
「何ておっしゃるの？」
「川住鈴子」
東籬子はちょっと首をかしげた。

「ちょっとわからないわ。うちの社も、この頃三百人からいるでしょう。営業の人なんかになると、同じ社でも、顔も知らなけりゃ、名前も聞いたことがない、という人がざらなのよ」
「彼女、今、二十九くらいになると思う。二年ほど前に入社したとかいう話だったから、まだ、それほど古くないんだ。川住数馬という、自民党の代議士がいるだろう。その人の二号の娘なんだ。もちろんちゃんと認知して本宅にも出入りさせて、アメリカ留学もさせてやった、と言うんだ。だけど育ったのは、赤坂で料亭をやっているおっ母さんのもとだったらしい。その点で、うちのお袋は少し難色を示しているんだけどね」
「それで、私には、どうしてくれ、とおっしゃるの？」
「たとえ、僕とその娘とのことが聞えて来ても、君と僕との間にあったことを黙ってて欲しいんだ。彼女は結婚するとすればいずれ退職するだろうけど、その前に、雑音が入るのは、あまり好ましくないしね。僕から彼女には、僕には、法的な届けこそしなかったけど、教会で式をあげた相手があったことは言うつもりなんだ。しかし僕以外から、このことが彼女の耳に入って欲しくないんだ」
東籬子はそういう公文の顔をじっと探るように見つめていた。

2

星野東籬子は、一時間ほどで、公文剣一郎と別れた。公文はバーを出る時になっても、まだ、一緒に食事をしないか、と思い切り悪く誘っていたが、東籬子はそれを断わって帰って来たので

あった。

《誰かうちで待ってるの？》

公文は笑いながら尋ねた。

《いいえ、火の気のない寒々したアパートへ帰るのよ》

小さな電気釜で一合の米を炊く。炊けた飯は釜の底に貼りついたように見える。それでも一食には食べ切れない。残ったご飯は、翌朝、食欲があれば、焼飯にして食べることもあるが、大ていはアパートのベランダに置いて雀にやる。施餓鬼供養であった。ここへ食べに来る雀や鳩たちが、本当に自分の知り合いの亡くなった人たちの生れ代りなら、どんなにいいだろうと思うこともある。

《あなたこそ、早くお帰りなさいな。お母さんが待っていらっしゃるでしょうに》

東籬子は言った。

《いやあ、おふくろはもう一人で済ましてるよ》

公文と夕食を食べてもよかったのだった。いつもの東籬子は、一人で虚しく食事をするくらいなら、相当にいやな相手と食べてもいいと思うくらいだった。しかし百日間だけ、夫であった公文と、懐かしげに食事をすることだけは、何故かべとべとした感じで、あまり趣味のいいこととは思えなかった。

東籬子は、公文とオマハの大学で知り合った。公文は修士課程におり、東籬子は学部の学生だった。公文は朗らかに見えるタイプで、日本人の留学生にありがちな、卑屈なところは少しもなかった。東籬子は公文の中に、兄と父を感じた。それが果して恋だったかどうかは今もわからな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com